



現代日本文學大系

54

片上 伸
平林初之輔
青野季吉
宮藏 本原 顯惟 治人 集



筑摩書房

現代日本文學大系 54

昭和四十八年一月二十日

初版第一刷発行

片上 伸
宮本顯治
平林初之輔
藏原惟人
青野季吉

著者

片上 伸
平林初之輔
宮本顯治
青野季吉
藏原惟人

発行者

井上 達三

発行所

千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一
電話東京(一九一)七六五一
振替口座東京四一―二三

印刷 株式会社 精興社
製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0395 (製品) 10054 (出版社) 4604

第四階級の文学

文芸運動と労働運動

文学方法論

文学の本質について

文学及び芸術の技術的革命

文芸批評論

文芸批評家の任務について

文学に於ける新形式の要望

政治的価値と芸術的価値

文芸運動と労働階級

「文芸戦線」以前

「調べた」芸術

外在批評論

目的意識論

正宗氏の批評に答へ所懐を述べ

現代文学者の階級的性質

政治的価値と芸術的価値の問題

行動精神論

散文精神の問題

文学的人生論

百万人のそして唯一人の文学

青野季吉集

心霊の滅亡

六〇

六四

六六

六八

七〇

七二

七四

七六

七八

一一五

一五三

一五五

一五八

一六〇

一六二

一七〇

一七九

一九一

一九九

二〇一

二〇七

二二三

宮本顯治集

「敗北」の文学

三七

過渡時代の道標

三九

政治と文学の立場

四〇

小林多喜二の回想

四二

共産主義と宗教

四六

網走の覚書

四七

『「敗北」の文学』を書いたころ

五一

私の読書遍歴

五〇

獄中の読書

五三

プロレタリア文学評価の前提

五三

『党生活者』の中から

五六

藏原惟人集

マルクス主義文芸批評の基準

六一

無産階級芸術運動の新段階

六五

プロレタリア・レアリズムへの道

七一

プロレタリア芸術の内容と形式

七七

再びプロレタリア・レアリズムに

七九

ついて

八四

マルクス主義文芸批評の旗の下に

八六

芸術的方法についての感想

八八

芸術理論におけるレーニン主義の

九二

ための闘争

九七

ソヴェート旅行記

一〇一

片上伸集

百政如ハテ支風を裂のやうなものを
を脱ゆのやうにしてきれいな流や
帯をしようのこともす。純正の
の植林は大分東洋的の味に
つゝある。かゝる風俗を
こゝに用ゐかけませう。時分柄
真々たる大子に成べく
五月
二月廿四日
桂井姉上様
伸

未解決の人生と自然主義

今の文学、中んづく自然主義の文学を指して、一部の倫理学者、その他の人々は、今の文学には高遠の理想なく、確固たる人生観なく、而してまた、雄大なる社会的経綸もないといふ。是れ等は恐らく事實であらう。しかしながら、その所謂高遠の理想や確固たる人生観や、乃至雄大なる社会的経綸や、それ等は果たしていつの世いつの時代にも常に存在し得るものであらうか。文壇を外にして、今の思想家、宗教家は、果たして真にそれ等の上に、安住の地を成してゐるであらうか。一種の理想、一種の人生観に安住して、人生の事了得し尽せりと信ずる人々は、或ひはあらう。吾人は斯くの如き人々の幸福を祝する。しかしながら、その理想、その人生観には、自づから限界がある。それ等一人の人々の懐抱する理想や人生観によつて、必ずしも自余の人生を安立せしめることは出来ぬ。人間の多数が悉く同一の理想を掲げ同一の人生観に安住して、人生を享樂し得る時代は、その理想乃至人生観の如何を問はず、真に幸福といふべきであらう。されど一旦その理想人生観の安固を失し来たつた場合には、先づその不安を感じて、それを脱する能はざるものが不幸か、不安を感じることもなくして、安立の夢に耽るものが幸福か、それは先づいづれでもよい。人生の悲哀痛苦を知らざるものが、知つてその疑惑を解決し得たりと信じ得るものは、その人自からには樂しき一生であらう。而も、それを以て、直ちに人生に悲哀なしといはれぬ如く、その所謂解決を人に強ひることも出来ぬ。その所謂解決が最後絶対のものでない限り、我れの解決は必ずしも彼れの解決でない。現存の哲学も宗教も、生の痛苦悲哀、死の

絶望恐怖に對して、何等の解決を与へ得ずと思ふとき、窮極吾等は絶望して狂となるか、一転してそこに向上の勇氣を起し来るか、恐らくこの二途の外はなからう。狂するものも狂せざるものも、現実生活の苦悶に埋頭して、如何にかしてこれを脱せんとする心は一つである。近代の文学は、かくの如き苦悶の文学である。今の我が文壇の自然主義も、所詮かくの如き苦悶を痛切に表白せんとする要求に基いてゐる。

芸術の上には、歓樂の調も悲哀の調も、共に排すべき理由はない。人生には歓樂もあり悲哀もある。しかしながら幾千載の後は知らぬこと、少なくとも今の世には、歓樂は一時に過ぎて、悲哀は永く心に残る。歓樂の一とときに我れを忘るることはあつても、それはやがて、永時に尽きぬ悲哀の、更に切なるを思ひ知らずに過ぎぬ。短かかりし夢一とときの歓樂の、さめずして永へにとどまらぬ恨みは常に深い。悲哀が人生の全部ではないが、少なくとも今の人生は、悲哀繁くして歓樂稀なる世である。悲しみに眼を閉ぢ苦しみを忘れて、安らかに在り得んことを希ふは、人の心の常であらうが、今は已にその悲しみに眼を閉ぢ得ず忘るることも出来ぬ悲哀痛苦を、押しかくしもみ消すべき術だにない。生を享けて、何人か痛苦悲哀を好むものがあらう。好まざるに來たる痛苦悲哀なればこそ、その痛苦悲哀は更に深い。痛苦悲哀は吾等の避けんとして遂に避け得ざる必至の運命である。人生の痛苦悲哀に心を勞して、苦悶の生を送るものは哀れむべきである。かくの如き苦悶の生を送るものに、何の高遠なる理想があり、何の確固たる人生観があらう。而も、これなきが故に苦悶の生を送るものは、これを求めて未だ得ざるものである。弱きものは、求めて容易に得がたきに疲れて、終に絶望の人生観に窮極するものもあらう。苦悶の圧迫に堪へずして、狂してわづかに生の真義を忘るるものもあらう。これ等は真に哀しむべき人々である。これを弱者といひ、頽廢者といふ、その称呼は何にてもあれ、さばかりの苦悶もなく、悲哀もなく、脆弱

なる地盤に立つて浅薄なる安心に満足するものに比ぶれば、所謂弱者類廃者も、亦た実(まこと)に一段の勇者である。浅薄なる安心の遂にたのむべからざるを知り、それをふり棄(す)てて自(みづか)ら苦悶(くもん)の生に入る、そのこと自(みづか)ら己(おのれ)に大いなる勇氣である。たとひ己(おのれ)が天分の力尽きて苦悶の窮極(きうごく)に解脱(げつだつ)の一境(いつけい)を拓(ひら)き來(き)たる能はず、或(ある)ひは絶望(ぜつぼう)の死に終り、或(ある)ひは正心(せいしん)を失して狂(くる)となるとも、人生の苦悶に面することをだに怖(おそ)れて、はかなき一時の安心に頼りすぎり、徹底せざる生活を持続する一部の怯者(けいしや)に比ぶれば、吾等はその結果の如何を問はず、まづその態度の雄々(ゆうゆう)しさを讃(ほ)せざるを得ぬ。人生の苦悶を痛切(つうせつ)に味(あじ)はんとする、そこには已(おのれ)に、人生の痛苦(く)を根本(こんぽん)より解決(げっかい)せんとする要求(ようきう)が、微(ち)かながらもほの見える。苦悶(くもん)は畢竟(きつじつ)求むる心である。求めて未だ得ざる心である。求めて遂に得難(とくがた)きか否(いな)かは求むるもの(もの)の間(ま)ふところでない。求むる心(こころ)即(すなは)ち得(え)らるべき実証(じつしやう)である。与(よ)へられたるものに満足する能はずして、自(みづか)ら求めんとする心が、近代(きんたい)人の苦悶(くもん)である。与(よ)へられたるものに満足せる人の眼(まなこ)よりこれを見れば、その苦悶(くもん)は徒勞(とらう)とも見られようが、求むるもの(もの)の切(き)なる心は、求めざるものには解(と)れぬ。与(よ)へられたる理想(りやうきやう)信仰(しやうぎやう)に満足するものは、根(ね)なき萍(ひら)に乗(の)るものである。自(みづか)ら求めて苦悶(くもん)するものは、根(ね)柢(てい)を探(たづ)んずて生命(せいめい)を樹立(じゆりつ)せんと力(ちから)むるものである。而してかくの如き努力(こつりく)には痛苦(く)悲哀(ひがい)が伴(とも)ふ。一旦(いつたん)の絶望(ぜつぼう)、一旦(いつたん)の創傷(そうじやう)、それなくしてはこの苦悶(くもん)の努力(こつりく)は生(な)ぜぬ。懷疑(ごうぎ)は苦悶(くもん)を生(な)み、苦悶(くもん)は努力(こつりく)を促(うなが)す。努力(こつりく)の根柢(こんてい)は一旦(いつたん)の懷疑(ごうぎ)がある。一旦(いつたん)の萎縮(ゐしゆく)がある。徹底(ていち)せる悲觀(ひくわん)の根柢(こんてい)には痛切(つうせつ)なる苦悶(くもん)がなくしてはならぬ。而して痛切(つうせつ)なる苦悶(くもん)の中には、必ず何(なに)ものかを求むる心がある。謂(い)ふところの求むる心は、若(わか)き心である。老(おい)いたるものは受け、若(わか)きものは求むる、これが人生(じんせい)一面(いつめん)の常態(じやうたい)である。若(わか)き心に求め求めて遂(つい)に容易(じゆんぎ)に求めたきを知るは、老(おい)いの心である。求むる心は無(む)限(げん)にして、吾等(われら)の生(な)の有限(りゆうげん)なるを覺(おぼ)るとき、求めやすきに就(つ)いて、本来(ほんらい)の要求(ようきう)の僅(ち)かに一部(いちぶ)をだに満(み)たして已(おのれ)まんとするも、また老(おい)いの心である。かくの如(ごと)き老(おい)いの心は哀(あは)しい。しかも、吾等(われら)が求めんとする若(わか)き

心は、あくまでも慕(まご)らに、無限(むげん)に抜(ぬ)がつて、その行き停(とど)まるべきところを知らぬ。若(わか)き心は一筋(ひとすぢ)に、ただ真(まこと)一途(いっどう)に羽(は)のして行(い)かんとする。個々(こご)人の行くべき程(ほど)には限(かぎ)りがあらう。個々(こご)人の力(ちから)には分(ぶん)があらう。さりながら、求めんとし行(い)かんとする心は不滅(ふめつ)である。吾等(われら)は必ずしも早く老(おい)いて、その行くべき程(ほど)を知り、分(ぶん)を弁(わ)まへて、自(みづか)ら安住(あんじゆ)ならぬ安住(あんじゆ)を作るには及(およ)ばぬ。吾等(われら)の求むるところは最後の安住(あんじゆ)である。その容易(じゆんぎ)に得難(とくがた)く達(た)し難(がた)きを思(おも)うて、仮(かり)りの安住(あんじゆ)を作るは老(おい)いたる人の心である。その志(こころ)は哀(あは)しいが、吾等(われら)の若(わか)き心はそれには与(よ)せぬ。たとひ一生(いっせい)を苦悶(くもん)に過(す)すと、通徹(つうてつ)せる苦悶(くもん)に一生(いっせい)を過(す)すは、寧(な)ろ本願(ほんげん)である、一時(いちじ)を避(さ)けて兩(りやう)やどりの安(やす)きを偷(ぬす)む一生(いっせい)は、求むるところなき生(な)である。生きて求むるところなき生(な)を醉生夢死(すいせいむうし)といふ。吾等(われら)はかくの如(ごと)き遊戯(ゆうぎ)の生(な)を欲(ほ)せぬ。生(な)は遊戯(ゆうぎ)でない、生(な)は真面目(まじめ)なる要求(ようきう)である。生(な)きんとする願(ねが)ひほど、吾等(われら)に切(き)なる要求(ようきう)があらうか。理想(りやうきやう)といひ、安住(あんじゆ)といふ、所詮(しよせん)真面目(まじめ)なる生(な)の要求(ようきう)に立(た)つてのことである。生(な)きんとする心、生きてその上に何(なに)ものかを求むる心、これがあるが故(ゆ)にこそ、生(な)を悲(かな)しみ生(な)を傷(いた)む心も生(な)ずる。かくの如(ごと)くにして、悲哀(ひがい)は痛切(つうせつ)に求むる心の発現(はつげん)である。人生(じんせい)の帰結(きけつ)を失(うし)へるものが、最後の解決(げっかい)を求めて未だ得(え)ざる不満(ふまん)の情(なさけ)である。人生(じんせい)に帰結(きけつ)があるかなきか、この所謂(しよすい)最後の帰結(きけつ)が果た(果た)して吾等(われら)の一生(いっせい)に得(え)ざるべきか否(いな)か、それ等を問(と)ふ違(ちが)はない。また今は問(と)はずともよい。ただ、何等(なんごう)か斯(か)くの如(ごと)きものを得(え)んとする心、得(え)ずして堪(た)へがたき情(なさけ)、得(え)ずしてはやまざる意氣(いぎ)、かくの如(ごと)き真面目(まじめ)なる要求(ようきう)が、吾等(われら)の全(ぜん)心を支配(しやい)する。而してこの要求(ようきう)は所謂(しよすい)若(わか)き心より発(は)する青年(せいねん)の要求(ようきう)である。今の時代(じだい)は、かくの如(ごと)き要求(ようきう)を、殊(ことごと)く痛切(つうせつ)に感(かん)ぜしめる。吾等(われら)の人生(じんせい)が未解決(みげっかい)であるといふ事実(じじつ)、少なくとも老(おい)いたる人(ひと)には解決(げっかい)ある人生(じんせい)が、若(わか)き吾等(われら)には未解決(みげっかい)であるといふ事実(じじつ)には、深奥(しんおく)なる意味(いみ)がある。

自然主義(じぜんしぎ)の文学(ぶんがく)は、若(わか)き心をもてるものの文学(ぶんがく)である。自然主義(じぜんしぎ)初(はつ)発(はつ)の動機(どうき)は、与(よ)へられたるものに満足(まんぞく)する能(よ)はずして、自(みづか)ら求めんとする苦悶(くもん)である。かゝる苦悶(くもん)を表白(たひやく)して、大胆(たんだん)に真実(まこと)にこれを懸(か)へ

んとするものが自然主義の文学である。一代の人心が、再び青年の心に還つて、その若き心を表白せんとするところに、必ず自然主義の文学は勃興する。純一無雜にして、正直大胆なる青年の心は、人生の悲哀痛苦を感じることに切なると同時に、またこれを表白するに當つても、逡巡し仮借するところがない。人生の悲哀痛苦を感じるの心鈍つて、浅薄なる安心を求め、若しくはこれを求め得たるものの表白は、幾重の皮膜を隔てて遂に心髓を衝かぬ憾みがある。自然主義の文学は人生に徹底せんとする。徹底せる悲哀の觀照に基いて、徹底せる表白を試みんとする。即ち根本を衝いて懇へ来たらんとする。而も青年の人生觀が、未だその根本の解決を得ざる如く、自然主義の文学には、もとより人生の根本的解決はない。ただその徹底せる觀照の結果を、正直に大胆に表白するに止まる。この意味に於いて、自然主義の文学は無解決である。事実をその根柢より赤裸々に描くといふに過ぎぬ。事實の真相生命を掴みだして、紙上につつつけたものに過ぎぬ。而も無解決といふは、人生を無解決なりと見切つたのではない。所謂無解決は断じて絶望でない。絶望は同時に死である、滅亡である。吾等の生が事實にして、その生の持続する限り、人生の疑惑を解決せんとする要求は熄まぬ。ただ、その要求の容易に満たし難きばかりである。つまり自然主義の文学は、未だ解決し得ざる人生の事象を、正直に大胆に表現するものである。今一步をすゝめていへば、人生根本の真相を表現して、その悲哀、痛苦、醜惡、乃至疑惑を大胆に正直に表白し、解決し得たりと見ゆる人生の根本には、実は未だ何等の徹底せる解決なき所以を明示するものである。隠れたる人生の悲哀、痛苦を眼前に暴露して、過去の安住の頼むべからざるを思ひ覺らしむるものである。かくの如き文学の生起に際して、先づこれに反抗の声をあげるものは、過去の安住の頼むべからざるを頼んで、尚且つ解決ならぬ解決に、一時の安きを偷まんとする一部の人々であらう。所謂これ等の人々の安住は虚偽の安住である。自然主義の文学はその虚像を排して、來たるべき眞の生活を予想する。自然主義の文学が、現実生活の暗黒面乃至

醜惡面を描写するも、その意味は結局未解決の人生を、未解決なりと知らしむるに外ならぬ。人生の解決帰着を求めて、未だ得ざるその悲しみを懇へんとするに外ならぬ。この悲しみの心はやがてまた哀憐の心である。自然主義の文学は、かくの如き要求、乃至かくの如き悲哀をその根柢の生命とする。一言にして尽せば、自然主義は悲哀の文学である。而も自然主義の文学は、必ずしもその表面に、人生の解決帰着を求むる所以を標榜するものではない。更にまた、求めて未だ得ざる悲しみを標榜するものでもない。自然主義の文学は、ただかくの如き未解決の人生をあるがまゝに描けば足る。未解決の人生を、未解決の人生として描けば足るのである。未解決の人生に浅膚なる解決を下してその一時の解決に従つて見たる人生を描くのは、自然主義の文学の志すところに反く。一旦未解決と觀じて、その未解決をさながら描き現はすのが自然主義の文学である。未解決といふが人生の真相であると信する以上は、その眞の人生を描くのが自然主義の文学である。未解決なる眞の人生、これ以外に自然主義文学の表現すべき領域はない。而してまたこれほど無限なる文学の題材があらうか。かくる人生の事實は、恐らく到底描き尽すことは出来ぬであらう。即ち、かくの如き人生の表現の内部裏面には、もとよりそれに対する不安、不満、乃至悲哀の心が横たはつてゐる。現実生活の表現は、現実生活に苦悶する人にとつて、所詮その苦悶の表現である。所詮抒情的表白である。わが心の苦悶を表白せんとする心、それを措いて何の現実生活表現の意味があらう。而も、その苦悶は現実生活から來た苦悶である。苦悶すべき現実生活の真相を離れて、苦悶の表白は無意義である。自然主義の文学は、かくの如くにして苦悶すべき現実生活の真相を表現する。而してその自家一己の苦悶を恣まゝに示さずして、苦悶すべき事實そのものを表現する。そこには作家の痛切なる沈黙がある。沈黙の裏には天地を震撼する苦悶の慟哭がある。未解決の人生をあるがまゝに表現する自然主義の文学には、沈黙の慟哭がある。未解決の人生を未解決と観うる限り、自然主義の文学は常に存在する。而してその

未解決に解決を求むる心の微かに動くとき、吾等が心は声をのんで慟哭せざるを得ぬ。所謂自然主義の文学は痛切なる悲哀の文学である。沈黙の慟哭の文学である。而も、一部の人々の夙くすでに主張せんとする所謂自然主義の向上的傾向は、実にまたこの沈黙の慟哭のうちに存する。求めて未だ得ざる未解決の悲哀のうちに存する。自然主義の文学は、決して世に謂ふが如き萎靡頹廢の文学ではない。謂ふところの萎靡頹廢の氣風には、すでに強烈なる何ものかの要求が動いてゐる。謂ふところの苦悶には、純一真面目なる若き心の煩渴がほの見える。

(明治四十一年二月)

自己の為めの文学

今の文学、中んづく小説が、あまりに専門的となつて、一般普通人の間には全く解せられず、少数の作家乃至批評家などの間のみ鑑賞せられる傾きを多分に有つてゐることは、否定し難き事實である。この事實に就いては、一般社会的見地から之を難じ且つ憂ふる側の説と、進歩に伴ふ特殊化として一層よき統一に達する為めの経過と見る説とがある。

今の小説中んづく新味の豊かなりと謂はるる側の小説が、少数の文学者(作家、批評家、乃至文学を鑑賞し研究する向の人々を含めて)またそれ等と趣味感情の生活のやゝ親近な少数の普通読者にのみ読み味はれて、是れまでの小説が有したる比較的多数の読者に読み味はれぬといふ事實は、これを言ひ換へると、今のその種の小説は今の一般社会とは極めて交渉の乏しいものであるといふことになる。そこで作者の説明を聴かねば解らぬやうな小説では困る、いや、作者の説明を聴いても尚解らぬやうな小説は全く困りものであるといふことになる。斯うなつて来ると、解る解らぬといふことが極めて曖昧なことであつて、それは作物そのものにもよるであらうし、また、それを読み味ふ人の鑑賞力にもよるわけで、一々實際の場合に就いて判断をして行かねば、何とも一と口には言はれぬこととなる。

しかしながら、こゝで進んで問はねばならぬことは、文学は抑も何人の為めに作られるかといふ問題である。今の小説が多数一般の読者に読まれぬとする以上は、いつまでもその状態に止まつてゐて差支ないものであるか、或ひはまた、つとめて多数一般の人に読まれるやう

に工夫すべきものであるか。小説を書くといふことは、主として社会即ち他の爲めにすべきか、自己の爲めにすべきか。抑もまた自他双方の爲めにすべきものか。而して今の小説はそのうち主として何れの爲めに書かれてゐるか。この「誰の爲め」といふことが問題である。

文学成立の源を尋ねても、またその窮極するところを考へても、所詮文学は自己を語り自己を表白するものである。自己を表白せんと欲するこの一要求を欠いては、文学は到底成立せぬ。この要求の切実にしてその表白の態度の誠実なるところに成立せる文学は、あらゆる種類を通じて真に生命ある文学である。而して自己を表白することは、その当事者に特殊の快感を与へる。表白の効果の深く広きほど、表白せる当事者の快感は深く且つ大である。出来得る限り多数の他人に、出来うる限り十分に自己の表白を感受して貰ひたいといふことは、文学者の望むところである。而も、あらゆる場合を通じて、自己を表白するといふ一要求が、あらゆる文学上の努力の根本の約束である。即ち自己表白の要求が第一である。

一般多数の読者に解るやうな、あまり楽屋落ちにならぬ作物を示せといふ言葉には、社会一般の爲め、読者の爲め、他人の爲めにといふ意味が多分に含まれてゐる。その一面は、ある度までは踏襲的に、形式的に、通俗的にといふ意味にも連なる。解りやすいやうに、娯しませしめるやうにといふ意味でもない。作者自からが甘んじてその種の需要に應ずることを欲し、また實際応じ得る場合にはそれまでのことである。また自己の心もちを十分に表白する爲めには、如何なる題目を選び、如何なる結構によつて、如何に描き出せば最も有効であるかといふ点に思ひを悩ますよりも、如何なる題目を選び、如何なる結構を作つて如何に描き出せば最も多くの人を引きつけることが出来るかといふ問題に心を悩める場合には、作者は己に自己の抑へ難き心もちを表はすといふよりも、主として他の爲めに作するのであるから、自己よりも他が主である。随つて多少は自己を枉げ、作爲し粉飾し、妥協することとなる。かくの如き作物は、たしかに多数の要求を

満たすものであらうが、一層深く見れば、その作物には眞の生命といふものが乏しい。たとへば紅葉の作などを見て、作爲し粉飾して面白く作り上げたあとが目に着く。人氣を氣にする癖が脱け切つてゐない。その最も甚だしいものは家庭小説であらう。作者の見識と心もちとがいふものも、低い、浅はかなものだ。つまり大向う相手の芸である。自分の心もちも何も顧みることはない。場当りで受けよといふ行き方だ。それも、作者自身がそれで満足し甘んじてゐる間はそれでよからうが、作者自身がその馬鹿々々しさに氣附いて来ては、もう今までのやうなことは出来ぬであらう。

今の文壇は、諸方面の事情がさし迫つて、作者自身の自己を目覚めしめた状態にある。大向う相手の芸の空虚を悟つて、作者自から己れに還れる状態に在る。他の爲めの文学の弊は、所詮自己表白の第一約束を逸するに在る。これの反動として、自己の爲め、自己の誠実なる表白の爲めの文学が起つたのは自然である。誠実なる自己表白の意味を十分に解せざる一般の読者、又は覺めたる新らしき個人の新感情新思想新人生觀を解し得ざる一般の読者、更にその新個人を表白する新らしき形式に馴れざる一般の読者が、今の新らしき作物を解し得ずといふは寧ろ怪しむに足らぬことである。あまりに多く「読者の爲め」に作られた小説は、一と先づ「作者の爲め」に生れんとするのである。文学はもとの源に掬み来らんとするのである。

自己の爲めの文学といふことは、自分の眼で見、自分の心に眞に感じ思つたことを表白するの文学である。自己を偽らぬこと、自己の思想、感情、觀察に忠実であること、要するに自己の眞実を蔽はずといふ態度が、今の作家には殊に著しく見えて来たのである。自己を偽り自己を蔽うて、他の意を迎へる爲めに書かれた作物は、その謂はゆる「他人」がどんな種類のものであつても、必ずその何処かに空虚を有する。新らしき作物によつて、一部の好評を得た作家が、その一部の人々の喜びさうなものを書いて当てようといふやうな動機から作つたものは、どこかに当て氣のある浮誇なものとなり易い。モーパスサン

などにも随分斯ういふ意味で失敗の作が多い様である。少数を当てて書くのも、多数を当てて書くのも人氣取りの点では五十歩百歩である。否、なま中少数を当ててゐるものは、少数相手であるだけに、人を欺き易い。つまり作家は自己を忠実に表白する、自己の個性を表白するといふ根柢を片時も忘れてはならぬ。文章は人格であるといふ言葉は、極めて陳い言葉であるが、それはつまり、文章は自己の個性の表白だといふ意に他ならぬであらう。作家が自己の個性に真実であればあるほど、作物の上に、どことなく作家の性格が現はれて来る。個々の作物は、作家のその時その場の心の肖像画のやうなものである。作物に現はれた作家の性格は、何と言つても打ち消すことの出来ぬものである。

已に作物が個性の表現である限りは、個性の大小深浅等は、直ちに真の作物の面に現はれて来ねばならぬ。それ故に、作家の個性を拡充し発展せしめるといふことが、やがて作物の味ひ意味即ち価値を、高く深く且つ広からしめることとなるのである。抑も自己に真実であるといふことは、自己に倣ふするの意ではない。自己に真実であれといふは、真の自己に還れといふ意である。再び自己に立ち還つた上は、その自己を展開し、拡大し、而してまた深くしてゆくのが、作家自からの発展である。作家の個性の発展すればするほど、作家の自己表白は、一層広く深く有効に為されることとなる。こゝに至つて文学の特殊性を難するの必要も自づから消滅するであらう。

吾人は謂はゆる小説の特殊化に、作家が自己の爲めに忠実に、自己の真実を告白せんとするの意味を見る。しかも作家が更にその自己を発展せしめることによつて、徒らに偏狹なる自己に倣するものなりとの非難を撤去せしめんことを切望する。

(明治四十一年十一月)

国木田独歩論

一

独歩といふ人は、幼少の時分から死ぬる時まで、少しも面變りのしなかつた人であるといふことが、誰かの追憶談のうちにあつたと覚えてゐる。實際少年時代からの写真を見て、あまり面變りがしてゐない。明治十八年十四歳時分の不恰好な中学校の洋服を着た写真を見てゐると、独歩が晩年殊に死ぬる一年前頃の面ざしとそのまゝのやうに思はれる。それと必ず關係があるとは言へぬであらうが、独歩がまる三十七年の生涯にも、その思想の上では、成熟はあつてもがらりと面變りがしたといふやうなことはなかつたやうに思はれる。独歩は死ぬるまで生れたまゝの独歩であつたやうに思ふ。早くから独歩の愛読者であつた小山内薫君が、「独歩の作物は初めから終りまで変らなかつた。其書いて居ること見てゐることは昔から同じだ。独歩が新らしいれば昔から新らしいのだ。独歩がえらければ昔からえらいのだ。」と言つてゐるのは、さすがに知己の言である。而してこれは作物の上ばかりではない、面ざしの上ばかりではない。その人物性行も、思想感情もすべてが生れたまゝで伸びて行つた。それ故に、独歩の生涯には、外部の境遇の變化は可なり多かつたが、内面の生活は一貫して変らなかつた。佐伯時代、民友社時代の独歩は沈思と読書と恋愛の人であり、諸新聞社時代は、政治的興味の人であり、近事画報社時代以後は雑誌の経営と文壇正面の人である。独歩の生涯はこの三期に分れるとも言へるが、それは寧ろ生れながらの独歩が種々の境遇事情に應じて現はれたのであつて、彼自ら三段に變つて行つたのではない。佐伯時代の

独歩も、晩年の独歩も、その面ざしの如く変らぬ同じ人である。ことに僕のやうに、その作物を読んだのも、その人に接したのも、つい終りの二三年の間に過ぎなかつたものには、『欺かざるの記』に見える独歩と、後の作品のすべてに見える独歩と、その実生活に見える独歩と、これ等はすべて一つであるといふ感じが強い。前後十四五年の間に実生活も作物も、思想も感情も、目に立つほどの面変りをしてゐない。独歩は『欺かざるの記』に於いて、既に殆んどその全面を見せてゐる。『欺かざるの記』は、人間として、「詩人」としての独歩を最もかくすところなく見せてゐるものである。

二

独歩は初めから「詩人」にならうとは思つてゐなかつた、小説家にならうとは思つてゐなかつた。二十八年五月二十四歳の頃にも、彼はまだ自分の往く可き方向に迷うてゐた。「今は我大いに苦しみつゝあり。則ちわれ政治家たる可きか。詩人たる可きか。實際家たるべきか。予言者たる可きか。これなり。国家の多難なるは吾をして前者たらしめんとし、人生の觀察は吾をして後者たらしめん」とす。彼は山口県にその幼少時代を送つて、維新志士の精神からも刺戟を受けた。植村徳富氏等に接して、キリスト教の救世的精神や実社会的興味をも感得した。ワーズワースの詩は人生自然の深い味を想はしめた。彼はもとより多感真実熱誠の人であつた。以上の刺戟がなくとも、彼は空漠としてその青年時代を過し得た人ではなかつたに違ひない。而もその当時の日本に於ては、最も清新な、また最も多く熱意を帯びた精神的刺戟を併せ受けた爲めに、この多感真実にして熱誠なる青年は、一層深く一層強く又真剣に自己の生活に思ひ悩んだのである。尤も独歩はその生来の氣質に於いて、多血質にはありがちな軽い浮はくしたところを相当に持つてゐた。彼の少年時代は順境に在つて、その俊敏多感なる感情性を圧迫するものがなかつたのであるから、彼は少なくとも一面驕兒であつたに違ひない。しかし我がまゝではあるがその一

方では極めて素直な、傲慢ではあるが又極めて気の弱い、多感熱烈ではあるが又極めて淡泊放胆な、——而もそのうちに生れながら雋秀の氣性を有つてゐた。彼は天分の豊かな俊才であつた。どのやうな境遇に置かれても、自分のライフの意味を考へずにぼんやりと日を送ることの出来る人ではなかつた。人間の生活の平凡なあたりまへな事実を、あたりまへと見てすますことの出来る人ではなかつた。「己れの死を痛感する者は生を痛感す。生を痛感するものは死を痛感す。生死を痛感する者はシセンスエリティーの始めなり。生死を痛感すとは例の言ひ草の口真似に非る也。大詩人、大予言者、大哲人、皆生死を痛感したる結果なり。大なる生命真の生命の入口なり。己れを天地の間に見出す者にして始めて然り。己れを天地の間に見出す者は凡ての者を天地間に見出す。即ち一個人の一挙手一投足、社会の出来事、自然の变化、凡て此の不可思議なる、争ふ可からざる、大事実なる、生ける、永久なる、無窮無辺なる、此の技の宇宙の裡に見出す也。……吾が、己れ及び事実を天地の間に見出し感受する能はざる時に於て、如何に言ふ可からざる悶を感じざるぞ。吾が自ら淺墓を感じ、皮相的を感ずる時は即ち此の時なり。」これは二十六年七月独歩が二十二歳の頃の日記に自ら記すところである。此れに似通つた意味の文句は『欺かざるの記』の到る処に繰り返されてゐる。これ等の文句のうちには、いくらか意味内容の充実してゐない氣味のものもあるが、独歩本来の性格が極めて真摯であつたことを知るには不足はないのである。独歩は詩人小説家として人生を思ひ考へたのではなく、一個の人間として自己の生を思ひ、また弘く人間の生活を思つた。生活の意味、生活の価値を考へるといふことは、彼自身の内から湧き出でた深い強い必要であつた。飲食便利の必要であるやうに、人生の考察冥想は寸分時も打ち棄てて置けぬものであつた。彼はこの意味から一個の哲学者でありまた精神家である。彼の哲学は幼稚であり単純であるかも知れぬ、不徹底であるかも知れぬ。しかしながら、彼は真正なる意味に於いて哲学を必要とし、且つ自らそれを造ることに努力した人である。彼の好んで用ひ

た言葉で言へば、彼は哲学の必要を痛感し、また自ら造つた哲学を痛感得せんとしてもがいた人である。彼が文章の習練から経上つた世間並の小説家と比べて、その風格を異にしてゐる最も主要なる点は、このところに在る。独歩は経世家風のところを有つてゐるとか、宗教道徳上の教導者といふやうなところを有つてゐるといふ批評のあるのは、もとより当然のことであつて、人間として人間の生活に思ひを潜めた彼が、而して殊に前に言つたやうな種々別方面の刺戟を受けた彼が、文章を操る旧来の小説家と違つてゐるのは怪しむに足りない。

独歩は小説家となり詩人となる前に、先づ人間としての自己の生活を思つた。「吾に著作者のヴァニテイあらば、神よ、即座に吾を殺せよ。希くは美妙を發揮する詩人として満足するを得たし。此心だに保持するを得ば一文を作り得ずして死すとも可なり。著作其事は何の意味もなければなり。吾は先づ吾が信する所によりて人として生存し、其の次に著作者として為さんことを望むのみ。」二十七年三月二十三歳の日記には斯う記してある。今日の眼から見れば、別に異常の覚悟でもない。島崎藤村氏の『新片町より』の序にも、こんな様な意味の言葉があつたと覚えてゐる。極めて平凡な真理である。而もこの平凡な真理が多くの人々の胸に沁みわたり、多くの人々を實際に動かし始めたのは、つい近頃のことである。尤も独歩が幾年前にこんなことを書いてゐようと、それが大してその人をえらくするわけでもないが、しかしまだ文学者として何一つ書かぬ前に、これだけの覚悟を有つてゐたといふことは、余程おもしろいことと思ふ。かういふ態度覚悟かへが、十四五年後の今日にも、潑刺たる生命を有つて動いてゐる。ほんやりしてゐてかういふ意味の深いことに想ひ到つたのでは勿論ないが、この辺を考へても、独歩が天分の豊かな、そして、極めて真摯な人であつたことはわかると思ふ。迷ひ抜いた末で独歩は結局詩人として立つ決心をした。しかし、その決心は、その晩年まで、いくらかづつ動き／＼してゐたらしい。それは独歩が初めから文学者となるつも

りで、他の事業などは少しも念頭にないといふ肌の人ではなく、生活の意義乃至価値の問題の苦悶から進んで詩人となる決心をしたところから、また彼の生れつきに、華美な動いてやまない実生活に興味を感ずるところがあつたために、また彼が少青年時代に受けた影響刺戟が種々の他の方面から来てゐたために、それこれの理由で、自分は必ずしも文学者としてのみ世に立たねばならぬ筈はないといふやうな心持から、政治の方面や、実務の方面に手を出して、一生懸命に働いたのであつたらうと思ふ。又或る時は文壇から正當に認められなかつたために、他の方面へ行くことを助けたこともあつたらう。とにかく彼はそれ等の他の方面で働くことを思ひ切つて、専心文学者となることので出来なかつた素質と境遇とを有ち、且ついくらかは自ら造りもしたのである。独歩自身日記のうちでところどころ反省してゐるやうに、彼は相當に物質的の榮華を欲する念乃至虛榮心を有つてゐたらしい。些細なことであるが、衣食その他物質上の供給に就いて、わり合ひにやかましい又贅沢な好みがあつたことや、その方面で負け惜しみの強かつたことなどを考へると、尤も我まゝな潔癖な、好き嫌ひの何につけても烈しかつた人だからでもあらうが、いくらかは物質欲とか虚榮心とかの混つてゐたことも事実であらう。しかし彼が文学以外の方面に手を出したといふことが、ひとへにその虚榮心に基づくといふのでは勿論ない。独歩の氣性として、実世間のことはただ傍観してゐればよいといふ氣にはなれなかつたのであらう。自分もその中へ飛び込んで一つ何か仕事をして見たといふ熱血性、而もよほど空想的な熱血性が、つい／＼彼を動かしたのであらう。そのくせ彼自ら実世間に手を出すことの不向きなことを夙に知つてゐたのである。「欺かざるの記」にも明らかに書いてある。また後になつて自分は空想の実行者だと自分から評してゐる。それでありながらやはりその方を断念することは出来なかつたらしい。彼は実に現世的執着の非常に強烈な人であつた。彼があんな風の「詩人」となることの出来たのも、一方から考へると、その強烈な現世執着の心があつたからだと言へるのである。

独歩が彼自ら好んで言つた「詩人」となる決心をするに就いては、種々に思ひ感うたのである。或ひは「昨夜吾は断然文学を以て世に立たんことを決心せり。則ち『人間の教師』として吾が力に能ふだけ務めて此世を終ることは最も吾が命運に適し、吾が生を値するを信じたり。……吾は自ら大なる名誉高き文学者を希望するに非ず。文筆を以て小学校教師たるを得ば甘ずべし。只だヒューマニティーの自然の声を聞き、愛と誠と労働の真理を吾が能くするだけ世に教ふるを得ば吾が望み足れり。」といひ、また、「あゝシエークスピア、ゴエテ、ユーゴー、新聞記者、大臣高等官、グラットストン、ピット、ナポレオン、クロムウエル、文学者、かゝる題目に由て築かれたる虚栄城中を脱して、かの三家村里、若しくは佐賀村岩城山下の同胞人類の生命命運を想へ、人生果して何の意ぞ。」多くの歴史は虚栄の歴史なり。パニティーの記録なり。人類眞の歴史は山林海浜の小民に問へ、哲学史と文学史と政權史と文明史の外に小民史を加へよ、人類の歴史始めて全からん。」といひ、また、「吾れ詩人の本分を考ふるに、此の人間の人性が人間胸臆の深底に於て発する幽音悲調を聞いて之を説明し、之れを教ふるに在り、則ち此の幽音悲調はクリストよりも、孔子よりも、ウォルツウォルスよりも、又シエークスピア、王陽明よりも聞くを得べし。又た自らの靈よりも聞くを得べし。聞いて而して之れを發揮する所以は則ち以て人間を教ふる所以也。」といひ、また、「吾が目撃する所の此の社会の、此の人々の生活の有様こそ深き意味のある事なれ。人生意味ありとすれば、此の目撃の事実の底にこそ大意味大奥妙も存するなれ。……此の擾々たる生民、遂に如何、畢竟如何、彼等の生命、彼等の精神、到底何の意味がある。大人聖哲の生命の意味は寧ろ心悟するに難からず、彼等は各々理想を有し、高遠偉大なる希望に由りて一生を走りたる者なれば、彼等の理想を看る時は彼等の生命の意味も感得し得べし。只だ彼の紛々擾々たる生民多数の生命に至りては、其

の意味遂に如何。思うて茲に至る実には茫然たらざるを得ず。思ふに人生の悲觀者が血涙懐恨に堪へぬも、此の有様に打たれしにあらざるか。然り、宗教も茲に起りしにあらざるか。然り。」と言つてゐる。これ等の言葉が、ワーツワースの芸術觀人生觀から多くの刺戟影響を受けてゐることは言ふまでもない。「幽韻悲調」は即ち sad music of humanity である。「小民史」は即ち low and rustic life の記録である。分の詩は孰れも a worthy purpose を有つてゐる、事象には強い感情が伴つて起り、其の感情には必ず一個の目的意味が伴ふものである、自分のこの考へが誤りなら自分に詩人たる權利はないと激語したワーツワースの意氣は、即ち独歩の「人間を教ふる」べしといふ意氣である。独歩は「詩人」として終始これ等の精神意氣を失はずまた渝らなかつたが、殊に彼の最も著しい特色は、「生きて肉体に由りて事情を作り、互に隔離せらるると雖も等しく一死の必ず来る可き命運に由りて不知深酷の國に合一すべきを思ふ時は、路傍の人にすら猶ほ握手せんことを欲するの感ある也。吾は自由なる天地の靈の一なるを自認し得たるが故に詩人たる可し。」と言ふ一節によく現はれてゐると思ふ。殊に「路傍の人にすら猶ほ握手せんことを欲するの感ある也。」といふ一句には、深い「情味があるではないか。吾等人間の生は紛々擾々として、自ら思ひ味ふこともなく、またもとより互ひの上を思ひ味ふこともなく、空々漠々のうちに過ぎて行き消えて行く。大海の波浪の如く、打ち寄せ打ち引く人生の潮は、千古万古渝りなく果なくどよめき動いてゐる。而も會て在りし人々、今在る人々は、皆すべて大海の漣波の如く、渦の如く、寸分時のうちに死滅してしまふ。自然の偉力を思ひ人間の生のもろさを思へば、悠々たる哀感の胸に響きわたつて、慟哭しても尚ほ足らぬ物悲しさを覚える。自然の力のまゝに押し流されて行く人々の別々の寂しい哀れな生活に何の意味があるか。それを思ふとちつとして傍觀してはゐられない氣持になる。而も皆そんな事は思ひもせず感じもせず、騒がしくその日々を送つて行く。人間生